

# 哲學研究

第百七十九號

第十六卷  
第二號

哲學的教育學と經驗的教育學との止揚點について

伊藤 猷典

## 目次

- 一、序 説
- 二、フリッシャイゼン・ケーラーの企圖
- 三、リットの説
- 四、イェンシュの説
- 五、前記の諸學説の長短
- 六、兩者の止揚點の發見方法
- 七、兩者の止揚點

## 一 序 説

哲學的教育學説と經驗的教育學説とを對立させて論じようとする時には、一般教

哲學的教育學と經驗的教育學との止揚點について

育學者は直ちにナトルプが言つた『哲學か經驗かといふ問題提出は既に出發點が誤つてゐる。哲學の支配を受け得ない經驗科學が存しないと同様に經驗の基礎を持たない哲學も存しない。人間は家を求めるのか又は土臺を求めるのかといふ疑問が成立しないと同様である。問題たりえ又は問題としなければならぬのは、土臺が正しく据ゑられてあるか否かといふこと、家は土臺の上に機械的に正しく建設されてあるか否かといふことである。カントもいふてゐる「凡てのわれ」の認識は經驗と共に始まるといふことについては何等疑がない』(Natorp, Paul: *Der Idealismus Pestalozzis*, 1919, S. 7. ff.)と言つた言葉を思ひ起すであらう。さうしてナトルプが哲學と經驗とを相即不離のものとするについては恐らく何人も反對しないであらう。(勿論氏の言ふ意味の哲學が經驗の土臺となるといふことについては後に論ずるであらうやうに問題となつてゐるが)だがこゝで問題として提出されてゐるのは、教育學は經驗科學として成立するか、哲學的科學として成立するかといふことであつて、經驗科學(例へば物理學)の根柢がカントがなしたやうな哲學によつて基礎づけられてゐることに反對してゐるのではない。カントが「例令凡ての我々の認識は經驗と共に始まるとも、それだから認識は凡て經驗から起るのではない」と強調して

ゐること、又同氏が第一批判の第二版の序言に於て「考へ方の異つた方法として、吾人は事物についてはたゞ吾人自身がその中に入れたもののみを先験的に知るのであるといふことを假定するもの」と述べてゐる様な見方を肯定すると否定するを問はず、或種の哲學的見方が基礎をなしてゐることには反對しないのである。ナトルプの言を借りて言へば「教育學は目的を論じなければならぬ。目的は人間の行くべき筈の方向であり、べき筈のものはあるものからは出て來ない、あるべき筈のもの」の研究は哲學の仕事である故に教育學は哲學に依らなければならぬ」(Natorp, Paul: Allgemeine Pädagogik, 1913, S. 2 ff.)と述べたこと、又イデーは自然概念でも、心理學の概念でもない(Natorp, Paul: Sozialpädagogik, 1920, S. 6 ff.)と述べてゐるところに、換言すれば教育學は經驗科學として成立するか又は哲學の一分科として成立するかといふところに、該問題の分岐點があると見るのが第一の見方である。

次にこの問題は認識論上、凡ての認識の最終根據は自明なる一般命題にあると見る合理論と、凡ての知識の最終の根據は個々にある單一なる體驗にあると見る經驗論との對立に端を發し更に進んだところでは事物の存在は心の外にある。従つて

事物の本質も又心の外にあると見る批判的合理論の立場を取るか、事物の本質は心の内にある、従つて事物の存在も心の内になければならないと見る意識觀念論の立場を取るかに従つて教育學の方法も變ると見るのが第二の見方である。

しかし前者の立場も内容の問題に觸れ根本的の解決をするためには矢張認識論迄溯らなければならぬから究極は第二の見方まで溯らなければならぬであらう。

右のやうに見ることに於て若し誤りが無いとしたならば、第二の見方に於ては無論のこと、讓歩して第一の見方に局限するとしても、ナトルプのやうに「哲學か經驗か」といふ問題提出は既に出發點が過つてゐる」と斷言するのは言ひ過ぎではあるまいか。事實歴史上に表はれた教育學說の中には

- 1 目的は哲學に依り方法は經驗によつたもの
  - 2 目的も方法も共に哲學に依つたもの
  - 3 目的も方法も共に經驗に依つたもの
  - 4 目的の問題には容喙せず、たゞ方法のみを經驗によつて論じたもの
- 等の區別あることは容易に知りうるのであるから。

自分は今歴史上に現はれた諸種の學說について検討しようとは思つては居ない。既にこのことについてはフリッツシャイゼン||ケーラーによつて或程度まで詳細に検討されてゐるのであるから。(Verg. Irischsen-Köhler, Max: Philosophie und Pädagogik. Kant-Studien XXII. S. 27 ff.) 自分はたゞこの兩者の對立を止揚しようと思つて企てた諸學者の說の主要なるものを述べ次に自分の考をのべようと思ふ。

## 二 フリッツシャイゼン||ケーラーの企圖

この問題の解決を企圖した最初の學者は寡聞なる自分の知る範圍内では前述のフリッツシャイゼン||ケーラーであるように思はれる。氏は前述の論文に於て歴史上に表はれた主要なる學說を経験的と哲學的とに二大別し、次に經驗的教育學說の論評については經驗の基礎の最も大なるものから漸次に小なるものへと移り、その際に歴史的要素を漸次に加味しなければならなくなる所以を論證し、哲學的教育學說の論評に當りても同様な論法を用ひ、哲學の基礎最も大にして經驗との交渉最も少ないものから漸次に哲學の基礎の狭いものに移り、且つその際に漸次に歴史的要素を取入れなければならなかつた所以を論證し、最後に斯様な理由からして兩者の立場の止揚點は歴史的立場にあるのでないかと説いたのであつたが、氏は更にこ

の論文を修正増補し、'Bildung und Weltanschauung. Eine Einführung in die pädagogischen Theorien, 1921.'と題し出版し、前述の二大分を改めて經驗的教育學、批判的教育學、思辯的教育學の三大分となし、思辯的教育學の根柢となる全體觀照の立場が相反した前二者の立場の仲介者となるものであると見た。先きの論文で哲學的と漠然としてゐたのが、このたびは批判的立場と限定し、先きの仲介的立場としての歴史的地位は思辯的立場へと變つた。こゝで言ふ思辯的立場とは、世界と自分、自然と精神との對立を越えようとする人間精神の渴仰心中にその根據を有してをり、その一般特長としてあぐべき彼等の主張の要點は、文化とは人間の並に非人間の實在を同様に包括し、支持するところの精神原理の作用であり進化であつて、非情の自然生起の囿となつたのでもなく、單なる適合點でもなく又自然に對立した精神生活の反對作用によるのでもない。文化とは世界史的過程であり、世界精神の發展段階であり、自然と神の調和の道行である。生命は自分自身の中に無限的な永遠の意味を有し、この意味は彼岸の世界に於て始めて實現されるのではなくして既にこの世界に於て、その構成の充實中に高上し、内容豊かになる道程に表はれる。吾人の現實の矛盾鬭爭、不調和も事物の普遍的な調和に於て解消され、人間の動作は如何に局限され、短見であつても

凡ては神に於て調和される。自然と歴史とは結合點なき對立ではない。精神生活とは、世界全體を支配する生命の繼續・向上・淨化である。現實と理想、存在と價値、必然と自由との調和は、常に如何様に變化しようとも、意識の無意識的生成、並びに發展中に於てえられると。かゝる世界觀をもつ思辯的立場から眺めると、教育とは文化が示した神と自然の融合中へ個人を入れ、外的な宇宙と精神世界との調和を表示するの過程である。故に教育とは素質の發展であり、内部條件の生育であり、蟄眠せる力の覺醒、圓熟である。同時にこの力によつて精神界に與かり、その精神力を無限に伸ばして楽しむ。自然と歴史を貫く神の意味が動物性を通過し超越しつゝ展開すること、自然の現象や文化の創造中に啓示される凡ての價値に對する普遍的な同情共感によつて自然性によつて限定された自我を擴大すること、生命の矛盾や懊惱を超越して自己満足の狀態に到ること、無限世界に身を委ねることによつて神に近づき、高めようとする果てしなき努力等は、凡て此の立場よりする教育教授中に含まれてゐる。故に經驗的教育學や批判的教育學が要求するものは一定の方法で結合しうるのである。

思辯的立場の教育には三種の特長があげられる。(1) 貴族的な個人主義的傾向、(2)

有機體の自己教育に對しては意圖的な教育干渉を差控へること、(3)自己教育は世界の精神内容を取入れることを以て根據とすること。

要之教育學を構成するに當り、經驗的教育學があるが儘の人間の自然性を根據とし、批判的教育學がこれと反對にあるべきもの、永遠に妥當するもの、理念を根據とするに對して、思辯的教育學は兩者を併有し、理想と現實との滲透個人精神と客觀精神の綜合のなされる小宇宙を根據としてゐると見たのであつた。

さうして教育學の體系問題は教育學よりも一層一般的な問題に、従つて世界觀の問題に關係を持ち、その一般妥當性の問題は統一的な唯一の一般妥當的世界觀の有無に關係を持つことになる。抑體系的な思惟は凡ての時、凡ての人に妥當する確固不動の原理から出發しなければならぬといふ信仰は數學的な考方又は數學によつて支配され構成された哲學から生じてゐる。だが數學的な一般妥當性のないのが精神科學、文化科學の運命である。その故は個人的の要素、非合理的要素のあることによつてのみ、生命の異質的要素が全體と結びつき、現實存在の矛盾が帳消されるのであるから、個人性非合理は精神科學からは取除くことは出來ないのであるからである。



要之氏に従へば、教育本來の仕事は生命と理想、自然と文化、存在と當爲、現在と未來、必然と自由とを結合させることにありと見る立場からすれば、教育學の體系を作ることは結局不可能であり、教育學の根據となるものはその方法論上の特有性に從つて決定すれば、全體觀照の思辯的立場にありと見たのであつた。

現存の學者にしてこの問題を論じてゐるものとしては精神科學派にてはリット氏を、現象學派ではイエンシュ氏をあげることが出来るであらう。

### 三 リットの説

リットは *Die Philosophie der Gegenwart und ihr Einfluss auf das Bildungsideal*. 1925. と題する著書に於て論理主義と心理主義との對立、並に兩者の止揚的立場として生命哲學、生命教育學の存することを説いてゐる點迄は、擧げた學說の例證は可なりの差異はあるが、前述のフリツシャイゼン、ケーラーとその揆を一にしてゐるが、生命哲學、生命教育學が果してよく兩者の立場を止揚しうるや否やを検討した點に於て、さうして止揚點としてはヘーゲルの辯證的發展説によらなければならぬと説いた點に於て、ケーラーよりも一步進んだと見なければならぬ。今その辯證的發展の論述の要旨をあぐれば次のやうである。

かつて在りし状態から、その當時にあつては理想の状態であつた現在へ移り、現在から一段高次の過去へ歸つて來る。吾人の精神の眞の構造は正反中に於ける統一であり、統一中に於ける正反の分離である。凡そ精神と呼ばれる程のもの、眞の形式は對立内の辯證のために存するものであつて對立の永久止揚にあるのではない。吾人の精神生活に於ては、主觀が理念に對する關係をば一が他に阿諛的に適合し、屈從するものと見ないで、緊張として、嚴肅な讓歩の出來ない要求として、對當關係の格闘として體驗する。主觀がこの困難なる戰闘を避けずに、それを一段高次の自我の戰闘場と見做し且つそれを求めることに依つて本當の精神となるのである。眞の精神の教育は人間の本質に具はれる必然性によつて生命と理念との反撥緊張を感せしめ、結合せしめようとする生活を頑強に行はしめるといふことに依つてのみ始めて眞の教育が出來るとなした。

氏は尙「教育思惟の方法」(Die Methodik des pädagogischen Denkens. Kant-Studien, Bd. XXVI. Heft 1-2. 1921. S. 17 ff.)と題する論文中に次のように述べてゐる。

兒童の本質を知ることがは兒童の曾て在つたもの、又現在見えるものを根據となす外に途はない。それ故にこの存在が當爲を眺めることによつて説明されうる時に

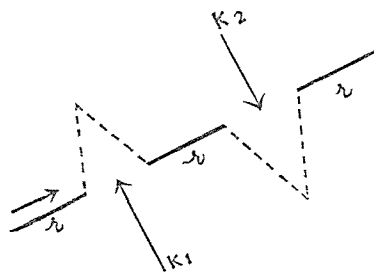
は反對に當爲は存在を眺めることに依つてのみ具體的決定を明かにすることが出来る。故に此の場合には存在の理會と當爲の規定とは交互關係に立つてゐる。その關係は兩者が互に對立的に存在し且つ繼續的に分離してゐてその特長を明かにし豊富にするものとは考へられない云々。と説き所謂二世界觀に明かに反對してゐる。

#### 四 イェンシエの説

イェンシエはその著 *Neue Wege der Erziehungslehre und Jugendkunde. Zur philosophischen Grundlegung der Pädagogik.* 1928. に於て超越的理想主義や補充的實證主義の缺陷を指摘し、氏自身は近き理想主義に立ち、實在そのものゝ根本形式を捉へて以て解決しようとするのであつた。

氏はルツソーやペスタロッチが教育原理として採用した「自然に従へ」と言ふ言葉に對しては深い理解を持ち且つ共鳴してゐる。この場合の自然とは、吾人が動物と共通に有するやうな風に解される皮相的なもの、又文化に對立した意味に於ての自然ではなくして、所謂自然法則や道德法則の根柢となるものと解した。(Verg. Jaensch, Erich: Pestalozzi. 1927. S. 19 ff.)。氏の方法として實在其物の根本形式を捉へるといふ

のも右の見方を根柢に置くものと見るべきであらう。氏は曰く、何故に實在の研究は理想の研究についての鍵を有しないのか。何故に實在の研究と理想の研究とは無關係に並立するのか。主なる理由は次のやうである。理想の存在は常に努力傾向を前提とする。傾向の特質は目的に向つてあるといふことである。例へば額をかけるために壁に釘を打たうと欲するとする。生起はまづ第一にこの方向から相對立した因果關係によつて抑壓され得る。釘は恐らくはあまりに鈍くて折れた。錘が餘りに輕かつた。又は自分が初めに置いた場所は壁の中に石があつたために駄目であつた。けれども自分が傾向を堅く守つてゐる時には、



生起は如何に障害に出遇つても又以前の方向に轉ずる。傾向の影響の下に立つ生起は常に一定の方向(上)に向ふ。例へば外界の因果關係によつてそれから押し出されることがあつても。傾向はかゝる特長を持つたものである。傾向から起つたものは(生起)故に常に内生的な内面からの條件的生起である。それは傾向するもの(Tendenz)の内面的本質から起る。従つてそれは周圍の事情による因果關係でなくして、寧

るそれに對抗して自己を處理するものである。かゝる生起の型は、理想が實在の研究から把握せられなければならない時に、實在に於て同様に示されなければならないのでないか。かゝる研究はその場合には實在の傾向の方向、又は目的點を見出すことを意味するであらう。

實證主義的な世界像を公理のやうに確信するものは、かゝる傾向は自然實在には何處にも存しないとする。物理にも化學にも内面傾向の概念を必要としない。物理學の發展の長足の進歩をなしたのは前述のやうな概念構成が全く除外された時に始まる。物理學は其當時擬人觀とひどく戦つたのであつた。同様に吾人は心理學の現代の危期に當つて吾人の根本概念を明かにしなければならぬ。しかしながらそれは先驗的な範疇論であつてはならない。寧ろ實在的な事物關係の基礎の上に立たなければならぬ。先驗主義は經驗の道、實在の觀察を輕視する。先驗的な思惟の方法によると非常に屢悪い、科學的には不明瞭な日常の經驗が入込む……。傾向は自然實在の領域にはない。何故ならば傾向は常に理念から目的を取出して來ることを前提としてゐるから。吾人はそれをたゞ吾人の最高の精神生活に於てのみ認める。……精神作用は實在界に屬するのではない。實在世界と理想世界

との仲介者として現はれる。リツカートの場合に於ける實在と價值との中間の第三帝國の内容として、又シェーラーの先驗的現象論に於ける不對象性として、従つて不心理性として現はれる。

内面的傾向は人間に於て型として表はれる。さうして型を調べることによつて當該兒童はどの方向に行き、どの方向に働くかを知り、以て教育の具體的方法を把握しうるとなしたのであつた。

##### 五 前記の學說の長短

フリツシャイゼンラーが肯定した全體觀照の立場は先驗と經驗の對立、個人と社會との對立を止揚しえて意義あるようにも見える。けれども方法論上から言へば哲學的立場や、經驗的立場と同一方向に向ひつゝ、ただ一段廣い範圍から眺めたといふのみで、眞の意味の止揚とはならず、この立場は詮じ詰めれば當爲の存在場所すらなくなる汎神論となり、宗教となり、形而上的詩となり、氏自身が告白してゐるような數學的な確實性を持たないばかりでなく、學として成立しえないこととなりはしないか。

次にリットが辯證法を説いたことは、又當爲と存在の兩者の全然分離したものでないことを指示した點に於て、又人間が常に緊張の状態にあることを説いた點に於て、われらの精神生活の構造を稍明かにした觀あるも、自分は左の諸點に於て疑問を有する。

リットの辯證的發展説は歴史一般の進展の道程と見るとき意義あることであるが、しかし氏は歴史一般の進展の過程と、個別的人間の生育の道程との間に根本的の差異のあることを見逃してはゐないか。個別的人間も進展期の進展過程は歴史一般の進展過程と揆を一にするであらう。けれども充實期(所謂教育期)の進展過程は必ずしもさうではない。この場合に於ては正に對する反を定立し、更に兩者を止揚するといふよりは寧ろ無なるが故に有を求めるのである。客觀的な歴史面から眺めると、前者に於ては歴史に對し何等かの寄與するところあるのであるが、後者に於ては寄與するとは反對に歴史面より贈與を受けるのである。歴史面にて活躍するための準備として、既存の文化財を習得するのである。リットの説が若し意義ありとするならば、個體の發生が種族の發生を繰返すといふ反復説が肯定される限度に於てであらう。けれどもウイリアム・シュテレンの説くやうに遺傳を傾向と見個體

の發生と種族の發生との間には内容上確定した性質の系列が遺傳すると見ずして、性向の表現中に形式上の類推がなされるのにすぎないと見るならば、辯證的發展を以て直ちに教育學構成の原理となすことは穩當ではないであらう。

今三者の立場の方法上の差異點を擧げると、全體觀照の立場は哲學的立場と經驗的立場と同一方向に向ひつつ、たゞ一段進んだ立場より止揚したものであり、リットのそれは精神科學の研究は自然科學とは異つた方法を取らなければならぬとの所謂精神科學派の立場が根柢となるものであり、イエンシユのそれは凡ての豫見をすて、實在そのものゝ研究から出發した現象學派に立つものと見ることが出来るであらう。

イエンシユが實在そのものゝ研究から出發し、二世界の起原を明かにしたことは、現象學派一般の研究方法を教育學上に巧みに取入れたものにて、該問題の解決に新曙光を與へるものと見られ、又この點から更に從來の心理學者の採つた無機の見方を捨て、有機の見方をとるべきことを高唱し、所謂典型の研究を説いたことは、精神科學派のシュプランガーの説く生活形式と論歩に於て多少の差こそあれ大體その揆を一にせるものと見るべく、従つて該問題解決の歸着點を暗示するものとして意



義あるように思はれる。

今前記三氏の説を通覽して見ると全體觀照の立場は前述の理由によつて採り難く、たゞ精神科學派の立場に立つリットの説と、現象學派の立場に立つイエンシュの説との間に解決の端緒がえられるのでないかと推定される。語を變へて言へば、一方は精神現象の研究から、他方は實在其物の穿鑿から出發し、出發點は各々異なるが道程は相依り相補けて以て同一目的を果しうるものでないかとも考へられる。蓋し現象學派のいふ意識の根本現象たる志向作用の研究の展開は精神科學派の取扱ふ問題まで行かなければ學的満足はえられず、精神科學派の人たちの根據を確立するためには、現象學派の所説に待たなければならぬのでないか。現にリットも現象論がこの問題の解決に與へる効績については、以前に分離されてゐた問題を特に早くに且有効に論じたのみならず、同時に概念上にも最も鋭く、且確信のある形式に於て論じたものに意識の現象論がある。『自分はこの中に當該思惟方向の綜合がうまくなし、遂げられるような方法上の原理を含んでゐると自分は信ずる。何故なれば非常に精細になされたその分解は如實の精神上の生起の實在性と、その中にある志向するもの、丁度そのためにそれに對しては超越的な對象性との間の關係を非常に明

瞭になしたので一面には意味を持つた内容が飛び離れないように生命の流れによつて保護され、他面に生命が墮落しないよう理念によつて保護され、しかもこの場合に両者は並列状態にあるのでなくして密接に結合してゐる。精神の歴史中に於て相矛盾したものとして常に相對立してゐた論理と心理とが、何れも他の權利を害しないように調和されてゐる。」と激賞してゐる。(Tit: Die Philosophie der Gegenwart und ihr Einfluss auf das Bildungsideal, S. 54) 現象學派の基礎に立ち精神科學派の立場を再吟味するとき問題の解決はえられないであらうか。

イエンシュの研究によつて、生命と理想、存在と當爲とが同一根原から發するものであることは判明したが、又リットの研究によつて存在と當爲とが生命に於て常に密着してゐることは判明したが、生命と理想、存在と當爲の別れ出づる所以の根據が遺憾ながら未だ明かにされてゐない。これを明かにすることによつて問題の解決へ一層近づきうるのではないか。

## 六 兩者の止揚點の發見方法

存在と當爲現實と理想の止揚點の發見方法については三種の方法が考へられる。第一は兩者を含む一屬廣い範圍に立ち眺めるもので前述の全體觀照の立場の如

きであり、第二は兩者の本質を究明し、その接觸點を捉へて止揚せんとするもので、ケーラーが「カント」研究誌上で述べた論文やリットの辯證的發展説の如きはこの部類に屬すると見られるであらう。第三は現象學的還元法によつてその止揚點を見出ださうとするものであつて、第一の方法が單に表はれた世界を廣く包括的に取入れようとするのに反し、第三の方法はそれの山つて來る所以の根本過程を明かにしようとする點で區別せられ、又第二の方法に對しては接觸する所以の根據を與へてその缺陷を補ひうるといふ點に於て區別しうるであらう。イエンシュのとれる方法の如き、未だ完全とはいへないがこの部類に屬するものと見られるであらう。これを要するに該問題の發見方法は二者の分れた姿を其儘包括するか、接觸點を捉へるか。共通根原を捉へるか、即ち前述の三種の方法しか考へられないが故に、發見の途は前述の三種の方法以外には存しないであらう。さうしてケーラーやリットの説が充分でないことは既に論證した。イエンシュも完全でなかつた。自分は第三の方法に従ひイエンシュの辿つた跡を更に一步進めたいと思ふ。

イエンシュが例示した傾向と生起とは、これ等を今一度括弧に入れて、より根本の相に於て捉へられないか。ハイデッガーの思索に従つて時間の様相に還元出來な

いであらうか。今その癡に倣ひつゝ、思索を廻らさう。

### 七 兩者の止揚點

抑生命とは生と死との間に介在し、今に於て何事かを志向する間斷なき連續作用である。連續せる一々の「今」は、其れ／＼の「今」に於て現はにされた對象内容の支點であるが、而もこれら無數の内容は「今」に於ける志向作用によりて、常に止揚統一せられてゐる。生命が作用の連續であることは、生命が時間性であることに外ならない。生命は時間性であるから常に過現未の三態を有する。「今」を中心として考察するとき、過去とは過ぎ去つた「今」を意味せずして、「以前」一般を、未來とはやがて來るであらうやうな「今」を意味せずして、「將來」一般を意味する。「今」連續としての將來も、過去も共に「今」に於て統一せられてゐることこそは實に他の事物とは異つた人間特有なる存在の仕方といふべきであらう。

空間は時間の延長と見るときは「今」は四維上下を統一する支點となる。この意味に於て「今」は時間と空間とを、従つて世界一般を支持するの支點と考へられる。

哲學者のいふ自覺に於ける統一とは過去と未來とを坐標とする「今」に於ける對象内容の統一に外ならないであらう。所謂事物の本質とか意味とか稱するものもこ

の「今」に於て統一せられた對象の内容の統一點を指すものと解すべきであり、従つて嘗つてシェーラーも言へるやうに批判的合理論も意識觀念論も半ば正鵠を得半ば誤つた見方であり、眞實相は事物は我々の外にあるが、その本質は我にありと見るべきであらう (Verg. Scheler, Max: Formen des Wissens und die Bildung, S. 47)。所謂精神界も自然界も其にかゝる「今」に於ける志向作用により構成されるのであるまいか。

個人的な生と死との間に介在した時間性は更に擴大されて歴史一般に及ぶ。「今」に於て思惟された過去とは自分の生誕より「今」に到る迄を指さずして「今」より「以前」一般を指し、未來とは「今」より死に到る迄の未來を指さずして「將來」一般をさす。こゝに於て個別的な生命は一般の歴史と關係を持つようになる。

この個別的な生命と歴史一般との關係を持つことによつて、こゝに教育の本義が表はれて来る。教育の本質は傳來の文化の繼承、發展にあるとしても、或は天職の遂行の助成にあるとしても、リットトの學說についてなした前記の缺陷はこの點を考慮することによつて補はれないであらうか。

過去と未來との生命に對する重要な識別點は、前者は「かくあつた」といふ實證的事實に反し、後者に於ては「かくあるであらう」又は「かくありうる」といふ可能性たるに

すぎない點にある。「かくあるべし」と云ふ當爲の世界は可能の世界に於てのみ可能のことであるからその妥當性は當然未來界にのみ存すると云はなければならぬ。所謂現實の世界とは「今」に立つて「斯くあつた」過去の世界を規整根據として過去のみならず「今」も未來をも律しようとする見方の表現した世界であり、理想の世界とは「今」にあつて「未來」を支盤として投影した可能性を以て、たゞに未來のみならず「今」も過去をもそれによつて律しようとする見方の表現した世界であると見られないであらうか。

われ／＼が理想を定立しうるのは未來を持つがためである。ベルグソンもいふが如く、計畫は進むことによつて與へられる。(Bergson, *Henri—I; Evolution Créatrice* 第三十二版、一一二頁)。未來を持つ我々に於てこそ初めて計畫といふことを、目的といふことを云爲しうるのである。

右のやうな見方が若し正しいとするならば經驗的な見方とは過去をば唯一確實なる支點とし、それによりて一切を律しようとする立場であり、哲學的見方とは未來を支點として一切を律しようとする立場といふことが出来るであらう。古來より哲學説が恰も藝術品のやう、それ自身としては完結してゐるが歴史を通じて全

體としての歸一點を見出しえないのは「今」は常に流動し、その坐標も常に變るがためである。と見るべきであらう。所謂經驗的立場、心理主義は未來面を無視したる點に於て缺陷を有し、所謂哲學的立場、論理主義は「今」の連續的事實を看過した點に於て缺陷を有すると見るべきであらう。ハイデッガーが一般妥當的な眞理が存在すると見るのは傳統的な基督教神學の餘弊であると喝破してゐるのは意義あることのように思はれる。(Heidegger, *Al.—Sein und Zeit*, S. 229—30)

人間が現實と理想の二世界に住すると云はれることも、又、人間が辯證的發展を無限に繼續するといふことも前述の「今」を玩味することによつて一層明白となり一層根據づけられるであらう。人間は常に「今」に於て理想を定立する。故に辯證的發展も可能なのである。従つて運命論、汎神論はこの立場からは取ることが出来ないものとなる。

イエンシユの稱する傾向とは人間の持つ未來性を素朴的に表現したものと見ることが出来るであらう。

これを要するに、右のやうに生命の根元和を究明することによつて經驗的立場も哲學的立場もその長短共に、その由つて出づる所以の根據が明かにせられ、それと同

時に精神科學派の立場も明かにされたやうに思はれる。さうしてこのことに誤りないとしたならば、問題の止揚點は生命の根元相の究明に待たなければならぬと言ひえないであらうか。さうしてかゝる生命の根元相を研究する學問をば如何に命名すべきかについては他日機を改めて論じたいと思ふ。(昭和五年十一月五日脱稿)